

歴史から学ぶ

「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」を“志”に掲げるNPO法人サロン2002は、毎年toto助成を受けて二つの事業に取り組んでいます。U-18フットサルリーグチャンピオンズカップと、公開シンポジウム及びその報告書です。本報告書には、本年度実施した二つの公開シンポジウムの内容が掲載されています。

公開シンポジウム①「成田十次郎先生を語ろう！－D.クラマーを日本に紹介した教育者・研究者・実践者」では、2022年8月に亡くなられた筑波大学名誉教授の功績を取り上げました。1964年の東京オリンピックへ向けて西ドイツから招聘されたD.クラマーを日本に紹介したのが成田先生です。先生はまた体育・スポーツ史の国際的な研究者として、教育の一環としての“体育”から文化としての“スポーツ”へという時代の変わり目に、さまざまな実践現場で尽力された教育者です。成田先生の教え子たちがJリーグ創設に携わりました。“いま”につながる日本のサッカー界、スポーツ界の改革がここからはじまります。

公開シンポジウム②「日本サッカーのルーツを語ろう！ part2－東京高等師範学校附属中学蹴球部の100周年を機に」ではもっと古い時代、大戦前のようすを取り上げました。外来文化として受容された近代スポーツは、日本において学校教育の場で展開されます。その起点となった東京高等師範学校（現筑波大学）については2016年度の公開シンポジウムで取り上げましたが、今回はその続編として、東京高師からサッカーの“種”と“魂”を受け継いだ旧制中学校を取り上げました。東京高師と同じ敷地にあった附属中学は「もう一つのルーツ校」と言える学校です。高師とグラウンドを共有し、教育実習にやってくるお兄さんたちにフットボールを学び、高師の先生方の授業を受けていた当時の附属生は、日本で最も早い時期にサッカーに触れた小・中学生です。1923年度創部の物語は、“遊び”が組織化された“部活動”の原点と言えるでしょう。

このころ全国各地に旧制中学が誕生しますが、中には野球部を置かなかった学校もあります。湘南中学もその一つです。当時から盛んだった野球の「害毒（弊害）」が論争として取り上げられる背景は、部活動改革真っ只中の“いま”と重なるところがあります。

今年度の公開シンポジウムは、ともに日本のサッカー史、スポーツ史に関する内容でした。歴史は教養として知っておきたいものです。単なる昔話でもかまいません。しかしよくみていくと、そこには人がいて、成し遂げたい何かがあり、時代背景を踏まえて何らかの判断をして行動してきたことがわかります。一つひとつの判断や行動が“いま”につながります。それは“これから”を考えるいまの私たちに示唆を与えてくれるものです。

NPO法人サロン2002は、“志”の実現に向けて、ささやかではありますが行動し続けています。いつか歴史として語られる時が来るでしょう。そのときに胸を張って、自分たちの判断や行動を語り継いでいけるよう、これからもあゆんでまいります。

“志”に賛同していただけるなら、私たちの仲間になりませんか？

2024年3月6日

特定非営利活動法人サロン2002

理事長 中塚義実

